

# 矢取地蔵縁起について

一

地蔵信仰が隆盛をきわめた中世にあつては、幾多の靈驗説話が流布し、それをまとめた地蔵靈驗記や、特定地蔵尊の由来をのべた地蔵縁起の類が数多く制作され、さらにこれを絵巻にしたものも多かった。この地蔵縁起や地蔵靈驗記の絵巻については、すでに梅津次郎氏と真鍋広済氏によつてその殆んどが紹介され、かつ論究されている。<sup>注1</sup> 本稿でのべようとする矢取地蔵縁起についても、すでに両氏によつて紹介されているところであり、<sup>注2</sup> またその写真は『近江愛知郡志』巻一（昭和四年・非売品）に掲載されているが、全巻ではない。したがつて絵の全体については、殆んど知られていないといつてもよいであろう。筆者は幸に、去年（昭和四十九年）の六月三十日に、滋賀県愛知郡秦荘町の安孫子家において、本絵巻を拝見、調査と写真撮影の機会を得たが、享徳二年（一四五三）の奥書をもつこの絵巻は、いわばこの時期における一つの規準的作例として注目すべき存在であり、製作年代の不明な作品の作期を推定する尺度にもなると考えられるので、敢えてその全巻の写真を紹介し、あ

矢取地蔵縁起について

わせて、私見をのべたいとおもう。

二

現在、本絵巻はこの靈驗説話の主人公、平諸道の末裔に当る安孫子俊彰氏の保管するところで、内題につづいて詞、絵共に二段で完結する。紙本着色で、その法量は別表の通りである。また、詞書は次の通りである。

## 宮 次 男

矢取地蔵縁起	法量 (単位・種)	
縦	34.1	
横	613.3	
第1紙	9.4	内題
2	45.3	詞
3	51.5	詞・絵 (絵21)
4	51.3	絵
5	51.3	〃
6	51.3	〃
7	51.4	〃
8	51.6	〃
9	51.4	〃
10	51.4	詞・絵 (絵29)
11	51.3	絵
12	51.3	〃
13	44.8	奥書

江州安孫子庄内金臺寺矢取地蔵縁起

近江國愛智郡安孫子庄に古寺

「あり地蔵を

安置せり檢非違使平諸道か氏

「寺也諸道か父

武勇をこのむある時隣郷推立

「の保より嫡數

百人よせて討んとしけり諸道

「か父の方には身に

挿図1 矢取地蔵縁起 滋賀 安孫子家蔵

したしき者六人ありける城の前に川をへたりたりければやかてもかけいらす矢をもて射合ける程に諸道か方に矢を射つくしてせんかたなかりけれハ氏寺の地藏菩薩を念したてまつりける程に俄に小法師矢庭にましりて矢をひろひて諸道か父にとらせけりその矢むなしからずしておもひのことくに敵を討おほりぬよろこひに氏寺へまいりたりけるにあつかりの僧上蓮といふものゝかたりけるハ昨日のたゝかひに出させ給しかハ御祈のために此御堂にまいりて花香をまいらせてあからさまに出侍し間に地藏菩薩のうせ給しかハ盗人のしわざにかと近邊をたつね侍しに夕かたになりてもとのことく地藏をすゑたてまつる也いかなる事かありけむ御かほに黒羽矢をいたてたてまつる也と申せハいな盗人のしわざにもあらず昨日たゝかひの庭に矢をひろふ僧ありき敵の黒羽の矢をかほにあたりぬとみし程にかきけつやうにしてうせにし此菩薩の化身にこそとなくくかたりしかハこれをきく人隨喜のなみたをなかしけり

〔第一段 繪〕

其後岩藏山に御堂をたて此地蔵を安置したてまつるいまの金臺寺これ隣郷推立保

に用水争論の時合戦に討勝いまに無相違  
事此地蔵の威徳による事以世かくれなし  
矢をひろひて御方にくはりたまひしによつて  
箭とりの地藏共申也

〔第二段 繪〕

華嚴經偈曰

若人欲求知三世一切佛應當如是觀心造諸如來

昔有僧俊者罪障甚深重此界報盡而造

冥途于岩地藏菩薩現形而示此文僧

俊誦之即立成佛其音攸及之象生悉

離地獄而生天上云々見此繪人須誦

此文以修冥祐也

仍金臺寺昔緣起紛失之間今尋此本

命畫師以奉寄進也

源朝臣高春(花押)

享德貳年癸酉十一月廿四日

三

さて、この説話を要約すると、檢非違使平諸道の父が隣郷から攻撃をうけた時、矢を射つくしたので氏寺の地藏尊に祈願すると、小法師があらわれて、矢を拾い集めて諸道の父に与えた。これを敵に射ると、その矢は思いのままに敵を射たおした。合戦がすんで氏寺に参詣すると、上蓮という預りの僧が語るには、昨日の戦いの折、この地藏尊が堂から居なくなったので盗まれたか

と思ひ、近辺をさがしたが、夕方になると、堂にもどっていた。そして不思議なことにはその顔に黒羽の矢が突きささっていた、という。これをきいて諸道の父は、昨日の戦に矢を拾ってくれたのは、この地藏尊の化身であったかと、感泣し、これをきいた人々はみな随喜の涙をながした（以上第一段）。その後、岩蔵山に御堂を建て、この地藏尊を安置した。現在の金台寺がこれである。また、隣郷と用水争論の合戦にうち勝つことができたのはこの地藏尊のおかげである。そしてこの地藏尊は、矢を拾って味方にくばってくれたので矢取地藏ともいう、とその名の由来をのべている。

この説話は『今昔物語』巻十七、『地藏菩薩三國靈驗記』巻六（良観統編）をはじめ、<sup>注3</sup> 地藏靈驗説話集に収められていて、中世以降、かなり広く知られたことが窺われる。しかし、本絵巻の第二段に述べられた岩蔵山の金台寺の寺号と、この合戦が用水争論によるものであることを述べているところに本絵詞の特色がある。<sup>注4</sup> また、細部の記述に多少の違いがあつて、戦場で地藏化身の小法師に当つた矢が『今昔物語』と『地藏三國靈驗記』では、顔でなく、背後となつていたり、また、黒羽の矢でなく、白羽の矢（『今昔物語』には羽の色を記せず）になつているなど、本絵詞と異なるが、寺僧の上蓮は浄蓮（『今昔』には僧名を記せず）とあつて、共通する所も少くはない。

それはともかく、この地藏尊に対する信仰は当時広く行なわれていたらしく、観智院本『地藏菩薩靈驗絵詞』<sup>注5</sup>の延徳三年（一四九二）の跋文に諸国の地藏靈驗所をあげた文中の近江の項に

蚊野村愛知郡孫子庄  
平諸道願ヤトリ地藏尊

と本地地藏尊を記載していることは、それを物語るであらう。

金台寺は現在永源寺派に属し、広く信仰をあつめた本尊地藏菩薩像（挿図2）は木造彩色の像で、『近江愛知郡志』巻五、「寺院志」から引用して、その裾裏に墨書した銘文を示すと、

子息安穩 離苦得樂

月□條□ 證大菩提

願主 藤原吉景法名西忍

貞應三年十一月 日 佛子

とあり、貞応三年（一二二四）の製作であることが判る。錫杖の代りに矢を持たせているのも、興味がひかれよう。

#### 四

本絵巻の各段の図様についてのべると、第一段は川を隔てて合戦する場面と、平諸道の父の屋形の背後に建つ地藏堂の場面の二つに分けられる。

合戦場面は詞書につづいて、赤糸織の鎧を着て、兜は脱げ、髪をばさばさにした武将を両脇から甲冑姿の二人がだきかかえるようにしてひきあげる光景からはじまる。これにつづいて白馬と栗毛の馬に乗ってかけつけた二騎が、薙刀をもった腹巻姿の兵が戦場を指さして語るのを聞く態。恐らく救援にかけつけた武者に戦況を説明しているのであろう。そのゆび指す彼方から頭髮を乱して、小者に負ぶさった甲冑姿と、その後から主人の兜をかぶり弓を持った平服の従者が主人の白馬をひいてついてくる。それを追うように、栗毛に乗った武者が弓に矢をつがえ、ふりかえりざまについてくる。これらの光景は、勝敗すでに決まった感を抱かせる。

ふりかえりざまに退く騎馬武者の後方、すこしの間隔をおいて、戦場の場面がひらける。川岸ぞいに、二引両に三盛酔漿草の紋をしるした楯四面を川に面して彎曲状に立てならべ、それぞれ楯を武者がしっかりと持ちすえている。その一人は主人の

挿図2 矢取地藏菩薩像  
（「近江愛知郡志」から転載）

兜をかぶった平服の下人である。また、兜をかぶった平服の下人が楯をはこぶ姿がみられ、矢合戦たけなわであることが知られる。楯の内では、楯の間から矢を放つ者、また馬上から射る者が示されるが、さらに楯の外の川辺に白馬に乗った武者が、弓に矢をつがえながら、右手を口にあてて前方をみつめているのが目に立つ。恐らく、対岸で矢を拾いあつめる小法師の姿を発見して、驚いている有様であろう。

このいわば攻撃勢の前には川があつて進撃を阻んでいる。この川は安孫子と押立保の間にある宇曾川であろう。楯は、板を取りはらい、橋桁だけになっており、渡ることは不可能である。

対岸は平諸道の父の陣で、岸辺には取りはずされた橋板が置かれている。川に面しては屋敷の板塀がめぐらされ、木戸口には、二引両に三洲浜の紋をしるした楯二面を立て並べて塞いでいる。楯の左右には、矢を射る武者が居り、楯の正面には一束の矢を左手に握って、かけ寄ろうとする小法師がいる。その顔の左側面に黒羽の矢が突きささっているのははっきりと窺われる。木戸の内には薙刀を持った折烏帽子に腹当て姿の武士が、前方をゆびで指しながら、屋敷の方をふりむいて何か云っている。恐らく戦況報告をしているのであろう。板塀とそれにつながる土坡を境として、諸道の父の屋敷が広がっている。その内部の有様は、まさに奇襲をうけてあわてふためく情況がよく示されている。すでに甲冑に身をかためた者もいるが、楯をかかえて据えようとする揉烏帽子腹当姿の武者がおり、縁に立って矢を射る揉烏帽子鎧直垂姿がみられる。これは当家の主人であろう。その背後の板敷の間では具足を持ち出してきた婦人の姿が窺われる。また、庭では楯をかつぎ出す小者、弓に弦を張る半裸体の男、裾を乱してかけてくる女などがいて、まことにあわただしい。

以上が前段に相当する合戦場面である。絵巻の構成として、この場面は、先ず、勝敗の結果を最初に暗示し、次にこの話譚の主題である矢取地藏の働きと矢の射ち合いを描き、最後に奇襲にあわてる平諸道の父の屋敷の有様が示されるわけで、時間的推移からいえば、逆行することになる。

しかし、このような構成は、合戦場面で攻防の両軍が対峙して表わされる場合、しばしばみられるところである。その場合、戦闘場面の中にはさんで、その前後に、それぞれの軍勢の活動情況が別々に示されるわけである。後三年合戦絵巻上巻第二段を例にあげると、ここには鎌倉権五郎景正が眼を射うたれた時、三浦兵太郎為次が土足で景正の顔を踏んで矢を抜こうとしたので、景正が怒った、そこで、為次は膝でおさえて矢を抜いたという話が描かれているが、絵は戦闘を前にしての味方の陣営につづいて、景正の眼にさされた矢を肩に足をかけて抜こうとする為次を景正が腰刀で斬りつけている所があり、次に敵の城壁に向って弓を引く景正の眼に矢が当たった所、さらに他の将兵の戦いぶりがあった、城壁の上から応戦する敵将兵、その背後の敵の陣屋が順次展開されている。

本絵巻の場合、結果において敵は敗走するが、緒戦では攻め手が奇襲して、平諸道の父の勢が劣勢、苦戦したことを示す必要があり、このような逆行表現を用いたのであるが、さらに、第二話の矢取地藏尊の参詣場面へとつなげる為には諸道の父の屋敷が、第一場の終りにこなければ、絵巻としての構成がなりたたなくなるのである。

次に、第一段の第二場面は、諸道の父の屋敷の裏手に示される。すなわち、屋敷の裏には網代垣が囲らされ、その外に地藏堂が吹抜屋台でもって示されている。堂の中央と思われる所におかれた須弥壇には、雲形上の岩座に踏割り蓮華を踏んで立つ地藏菩薩像が安置されており、その左の頬に黒羽の矢が一本突きささっている。像の背後は背障があつて、松樹が大きく彩画され、その葉はいわゆる車輪松になっている。この地藏像の前には墨染の衣をつけた僧が柱を背に坐し、その対面に直垂姿の武士が弓と箆を背後の戸に立てかけて坐している。僧は地藏堂の僧上蓮、武士は諸道の父であろうか。上蓮の背後にも一武士がおり、また正面の縁には、中央にまだ鎧姿の武士が坐し、その左右に直垂姿の武士がひかえ、前庭には二人の武士が地藏をゆび指しながら何か語らっている。また、堂の脇には縁に片臂ずいて坐り眠る武士がいる。詞書にのべる通り地藏の靈験に驚き、有難がる光景である。こうした参詣光景は、絵巻にはしばしばみられるものである。

第二段は岩蔵山に移された地蔵堂を描いたもので、小高い岡を参詣の方向に向って進む四人の老若男女がおり、次に正面が三間の地蔵堂があつて、堂内正面には、須弥座の上で踏割り蓮華に立つ地蔵菩薩像が窺われる。その錫杖を持つべき右手には黒羽の矢がにぎられている。その正面には坐して読経する態の僧がおり、向って左側に二人の僧、右側に六人の善男善女が描かれる。彼らの表情はいかにも敬虔そのものである。

## 五

さて、各場面の描写をみると、必ずしも精緻な描写でない。建物における屋台引きもフリーハンドで引かれ、色彩は淡く、また扉や壁面を省略したところも多い。さらに諸道の父の屋敷裏の地蔵堂では、正面の上下の長押が平行せず、角柱からのびた長押が、反対側の角柱の方向でなく、側面の正面側柱に向っているかのようにみえるなど奇異などところがある。また樹木の描写も簡略で、樹葉も付立ての上に墨の点描を重ねて描いている。この樹法はしかし、室町時代の絵巻ではしばしば行なわれるところである。これに対し、人物は比較的濃彩で、衣服の文様もくずれることなく描き込み、具足の描写は、袖裏なども各板の重なりをほり塗りで示すなどかなり念を入れたところが窺われる。その色調は平明で、特に水色系の色彩は、室町絵巻に好んで用いられるところの白と青の混合色で印象的である。これら人物の面貌は、比較的濃墨で描かれ印象的であるが、その顔立ちも形式化しておらず、各人各様に一種の個性と表情をもたせて表現している。そして、その描線には枯れたところがあつて、しかも、毛髪の生えぎわ、髭鬚などの形も自然で、そこには少しの硬さ、ぎこちなさもみられない。このような人物描写は明応四年（一四九五）の硯破絵巻<sup>注6</sup>や槻峯寺建立修行縁起<sup>注7</sup>、長享元年（一四八七）の星光寺縁起（挿図3）、それ以前の制作と考えられる狐草紙<sup>注8</sup>（挿図4）など土佐光信筆に帰せられる絵巻につながるものがあり、時代性を明示するものである。そして、これらの作品との近似性から墨画的手法のつよい根津美術館本地蔵靈験記絵巻<sup>注9</sup>（挿図5）とともに本絵巻は、絵巻における光信画風の成立を考ふる上に示



峻するものがあるということができよう。すなわち、光信の作風が形成される背後にはその基になった既存の様式があり、それをふまえて、光信の作風なり、光信様の画風が成立すると考えると、そうした、いわば新しい画風の要因の一つが本絵巻や、根津本地蔵靈験記絵のなから形成されていくのではないかと考えるのである。

その意味で、享徳二年（一四五三）の奥書をもつ本絵巻は、多少画格は劣るが資料的に重きをなすものであることはいうまでもない。

## 六

以上、本絵巻の絵画史的考察を行ったが、次に本絵巻の跋文についてふれることにする。

跋文には、先ず華嚴経の偈を引用し、この偈を地獄で地藏菩薩から教えられた僧俊なる者がこれを称えることよって地獄から救われ、天上に生まれることができたという説話を掲げている。

華嚴経の偈「若人欲求知 三世一切仏 応当如是観 心造諸如来」の句は、六十卷本華嚴経の卷第十、夜摩天宮菩薩説偈品第十六で如来林菩薩が頌した偈の最後の四句で、これを称えることよって地獄から救われるという説話は、『今昔物語』卷第六「震旦王氏 誦華嚴経偈得活語第

<sup>注10</sup>

たことが想像される。しかし、本巻にみる僧俊なる人名は上記の文献にはみられず、これが明記されたものに、宋常謹撰『地藏菩薩応験<sup>注11</sup>記』「京師人僧俊地藏感応記」第五の話がある。但し、上記の説話集では偈句に多少の相違があつて、『私聚百因縁集』では「若人欲了知 三世一切仏 応観法界性 一切唯心造」と八十卷本華嚴経卷第十九、夜摩宮中偈讚品第二十の偈句<sup>注12</sup>を書き、

某氏藏

三十三」をはじめ、『私聚百因縁集』卷第六「地藏菩薩 教偈救苦之事」、『三国伝記』卷第五「悪業罪人遇地藏菩薩免苦事」など、鎌倉・室町期に成立した説話集にも収録され、また観智院本『地藏菩薩靈験繪詞』の跋文にも、この偈を引用し、その功德を略記している。恐らく、中世広く知られていた偈句であり地藏説話で、また、この功德を地藏靈験記の跋文に挿記する習わしとなってい

挿図4 狐草紙

挿図5 地藏靈験記絵巻

東京 根津美術館藏

『今昔物語』、『三国伝記』、観智院本『絵詞』はいずれも六十華嚴ではあるが、第一句が「若人欲了知」となっていて、一字が異っている。なお常謹本『応驗記』は本絵巻と同句である。

次に、跋文を書いた源朝臣高春は、安孫子家文書(二二)<sup>注13</sup>によると、

この跋文を書いた同じ年の享徳二年八月に、「秦川山觀世音菩薩縁起」を書いている。この観音は矢取地蔵と共に郷民の守護仏として信仰されたもの<sup>注14</sup>のよう<sup>注14</sup>で、地蔵、観音の両縁起を書いた源高春は安孫子庄に深い

関係のある人物と考えられる。江戸中期の資料ではあるが安孫子家文書

(三二) 永田瀬兵衛宛書状によると、

覺

一、官許之系圖之寫御望之由御尤ニ奉存候、日□御咄申通り先年火災家系等焼失致シ、先祖より申傳候書付如此(無)御座候、荒々申傳相知レ候通書付遣シ申候、

一、安孫子氏と申者古來諸道公より相續家ニ而御座候、其元被仰聞永田信濃家より先代安孫子家へ娘縁取仕候と申傳、夫故永田と名のり申候而も不苦と申傳候、佐々木家高春と申者安孫子家へ養子ニ参り候と申傳候、然レ共兩家共ニ安孫子何代ニ相當り候哉委ハ不存候、然ル時ハ筋者平家也、氏ハ源氏と申傳候と申候、右之通申傳ニ而御座候、安孫子落城ハ當國貳拾四ヶ城旗頭觀音城破候後、大閤打破被申候而當年迄ニ百四十年餘ニ罷成申候

(後略)

四月廿三日

永田瀬兵衛様

と伝えられており、佐々木京極家の支流の出自と考えて、先ず誤り無  
いと思われる。

矢取地蔵縁起について

更に、安孫子庄と、隣郷押立保郷との水争いに關する記事が、『蔭涼

軒日録』寛正五年(一四六四)三月十七日条にみえて、<sup>注15</sup>それには

當院領、江州安孫子郷、二階堂山城守知行(分ノ字) 江州押立保郷民等、

就用水之事、及弓矢合戰、仍可有御成敗之事、并京極鞍智又次郎高夏

知行同處也、仍以訴狀申レ之、當院奉行飯尾左衛門太夫、鞍智方奉行、

清和泉守出御奉書、可レ致成敗一之由、被ニ仰出、即召ニ兩奉行雜掌一命

之、

とあつて、鹿苑院領と同庄を領する鞍智又次郎高夏の領民と、二階堂山城守政行の所領する押立保の郷民が用水争いから弓矢合戦に發展したことを伝えているが、この時の安孫子庄を領した鞍智氏も京極家の支流であり、又次郎高夏と名のる人物と高春とは何かつながりがあるとみるのは、穿ちすぎであらうか。

それはともかく、寛正五年は、享徳二年より十二年の後で、さらに、それより二十四年後の長亨二年にも安孫子と押立保の用水争いが起つており、『蔭涼軒日録』長亨二年五月三日、二十二日条)、当時、両郷は何かにつけ、不穏な状態にあつたことが推察される。そのような時期に本絵巻が新しく製作されたといふことは、そこに安孫子庄の郷民の生活に密着した地蔵信仰が生々しく感じられるといつてよいであらう。

注

1 梅津次郎氏論文

「帝室博物館藏地蔵縁起絵巻考」美術研究 一三一号

「常謹撰『地蔵菩薩應驗記』大和文化研究 一〇〇号

「矢田地蔵縁起絵の諸相」美術史 三九号

以上『絵巻物叢考』所収

「法然寺藏地蔵縁起絵巻について」美術研究 一四三号

「子とろ子とろ」の古図―法然寺藏地藏験記絵巻補記」ミューゼウム 五〇号  
 「フリア画廊の地藏験記絵と探幽縮図」大和文華 一三〇号

以上『絵巻物叢誌』所収

「地藏験記絵巻 法然寺本」日本美術工芸 三三二―三三三

「矢田地蔵縁起絵巻 別本」日本美術工芸 三三二―三三三

以上『絵巻物残欠の譜』所収

真鍋広濟・梅津次郎氏共編『地藏験記絵巻詞集』 古典文庫 一一八冊

真鍋広濟氏論文

『地藏尊の研究』、『地藏菩薩の研究』、『地藏説話の研究』

2 真鍋・梅津両氏『地藏験記絵巻詞集』に詞書の公刊と、梅津氏の略解があり、角川版『世界美術全集』7日本・室町の巻に、グラビア一図が梅津氏の解説で紹介され、また

真鍋氏『地藏菩薩の研究』に、「戦場の地藏尊」として、この絵巻についての記述がある。

3 真鍋氏『地藏菩薩の研究』によると、このほか「地藏菩薩秘記」、「地藏感応伝」(巻下)、「地藏直談鈔」(巻三)等多くの地藏験記絵巻に収められているというが、これらについては未だ確かめていない。

4 注3真鍋氏論文による。

5 真鍋・梅津両氏『地藏験記絵巻詞集』に公刊され、真鍋氏の解説がある。また、真鍋氏『地藏菩薩の研究』に全巻の写真とその翻刻がついている。

6 梅津次郎氏「硯破絵巻その他―小絵―の問題―」国華 八二八号

7 橋崎宗重氏「槻峯寺建立修行縁起」国華 七八三号

8 拙稿「足利義尚所持狐草紙絵巻をめぐって」美術研究 二六〇号

9 拙稿「地藏験記絵巻について」仏教芸術 九七号 での根津美術館本について考察し、この絵巻の絵画史的な位置として、鎌倉絵巻のもつ古典的大和絵から、墨画的手法をとり入れ庶民的感情を巧みにもちこんだ土佐光信の様式が導き出される過程にあって、光信様式の成立を示唆する作品と考えた。

10 大正大蔵経巻第九 四六六頁 上段

11 梅津次郎氏蔵、前掲同氏「常謹撰『地藏菩薩験記』」の公刊による。なお、本書は

已統蔵(第二十二套第二冊)所収の『地藏菩薩像験記』と同本であるが、梅津氏の解説によると、字句にかなりの異同が見出せる由である。

12 大正大蔵経巻第十 一〇二頁 上段、中段

13 「元興寺仏教民俗資料研究所年報」第六冊に赤田光男氏によって「近世村落における信仰史料―近江国愛知郡岩倉村安孫子家所蔵文書―」が紹介されている。以下安孫子家文書の引用はいずれもそれによる。

14 注13の文献とその掲載写真によって縁起文を示すと

「秦川山觀世音菩薩ト云ハ人皇八十年代高倉院御宇ニ當テ松尾寺密増坊ト云僧慢心ニテ邪道ニ陥リ大竜ト成テ秦川山之淵ニ入人民越惱シ諸人迷惑ス、因茲松尾寺光蓮法印加持ノ封しこめ觀世音菩薩ト成し給ふ也、仍テ今ニ秦川山觀世菩薩ト申也

享徳二年

源 高春

書之

壬申八月

なお、壬申の干支は誤りで、享徳二年は絵巻奥書の通り癸酉でなければならない。恐らく、この文書は転写されたもので、書体も絵巻と著しく異っていて、転写に際し、享徳元年とすべきを二年と誤写し、干支は原文通り壬申と記入したのではなからうか。いまこの縁起を読むと、郷民の迷惑を救うため大竜を観音に封じ込めた次第がわかるが、また竜は水神としての俗信仰があり、ここにも用水に悩む農民を救う観音が登場する。

15 大日本仏教全書本による。